

# 9

実践研究報告 No.1723



## 公園をコミュニティプラットフォームで コミュニティ再生の拠点に

実践研究テーマ：公園を活用した住民主体のコミュニティプラットフォーム

# 9

実践研究報告No.1723

## 公園を活用した住民主体の コミュニティプラットフォーム —川崎市宮前区を対象地とした「まちかどマルシェ」の実践—

宮前まち倶楽部 代表/辻 麻里子

渡邊 秀樹、藤牧 功太郎

大都市郊外のベッドタウンの典型的地域である川崎市宮前区において、公園等の公共空間で住民主体のコミュニティプラットフォームによる「まちかどマルシェ」を展開した。活動の狙いは、公園の新たな活用方法を見出し、地域活動団体の活性化、社会的包摂力を醸成することである。公園などの公共空間で8回のまちかどマルシェやまちかどライブラリーを行い、参加者相互の交流、プラットフォームの拡充、行政等他セクターとの連携など一定の成果を得たことにより、公園が人々の「つながる」ニーズを実現する社会的ハブになる可能性を見出した。

本実践活動は、郊外住宅地の重要課題であるコミュニティ再生の方法を模索するためのケーススタディである。



写真3-5 ゆっくり話す

## 1. 実践活動の背景と目的

### 1.1 郊外住宅地の現状と課題

大都市圏郊外部では、近年、団塊の世代を核にした高齢化の急速な進展、単独世帯の増大、また女性の社会進出に伴う幼児、小学生の待機児童数の増加など、地域との関わりやケアを必要とする人々が急増している。それに伴い、従来の自動車に依存した暮らしから、徒歩圏内に生活利便拠点を必要とするライフスタイルへと、住生活に大きな変革が起こり始めている。

郊外住宅地はまた、分譲・賃貸マンションなどの集合住宅居住者が多く、今後さらに増加すると予測される。内閣府の「国民生活白書（平成19年版）」文2）は、単身世帯の人は隣近所との行き来や町会、自治会への参加が他の世帯より低いこと、また、地域から孤立している人は借家集合住宅に多いことを明らかにしている。集合住宅居住は、実は社会的孤立に陥りやすい住環境ともいえる。地域から孤立しがちな単身世帯の増加と相まって、こうした人々の孤立を防ぎ、**社会的包摂力の高いコミュニティづくり**が求められる。

地域のコミュニティ活動の現状は、町内会等の地縁型組織も、子育てや高齢者支援などのテーマ型市民活動も、ともにメンバーの高齢化や固定化による担い手不足、活動場所や資金の不足、情報発信力の弱さなどから、**その継続が危ぶまれている**。もとより、旧住民中心の地縁組織と新住民の多いテーマ型組織の連携の難しさも、郊外部の地域コミュニティの大きな課題とされてきた。

一方、厳しい財政状況下にある行政は、公共施設の老朽化による建替えや、公園や街路空間などの維持更新の負担が課題となっており、民間との協働による管理運営が模索されている。川崎市でも、地域コミュニティの核としての公園の活用を図るとともに、市民との協働による管理運営を進めようとしている。

今日、歩いていける日常生活圏内で、**誰もが助け合えるような地域のコミュニティケアやまちづくり活動活性化の仕組み作りが喫緊の課題**となっている。この解決には、社会的包摂力が醸成されるよう、コミュニティづくりとその活動基盤を形成することが必要であり、その方法論の構築が求められている。

### 1.2 コミュニティプラットフォームについて

人びとの社会関係の一側面として「自助、共助、公助」と分類される中で、コミュニティは「共助」を対象とする概念である。それは、一定の共通の基盤を共有する集合体である。

コミュニティプラットフォームは、総務省の「新しいコミュニティのあり方に関する研究会」（2008）文4）で提起されている。その背景には、従来の町会の衰退とともに市民活動の胎動がある。地域社会において、これらの各プレイヤーが協働して地域課題に対処することが重要であり、政策的なテコ入れも必要である。これらは、市民センターの運営協議会、地区協議会、また、中間支援組織としてのまちづくりセンターなどにみられるようなコミュニティプラットフォームが形成され一定の成果をあげている。しかしこれらが、自治体の全域若しくは出張所、学校区を範囲とし、行政が主導して設立しているのに対して、本実践活動は、街区公園の利用圏域という小地域において、従来の行政主導とは異なる住民の自発的なコミュニティプラットフォームを形成するものである。また、活動を可視化できる公園等の身近な公共空間を活用することの有効性も提言し、検証するものである。

### 1.3 実践活動の目的と目標

本実践活動では以下の①②③を検証する。

#### ①コミュニティプラットフォームの効果を明らかにする。

本実践活動は、「コミュニティプラットフォーム」を構築し、マルシェを開催することを企図している。プラットフォームメンバーには、宮前区内で様々なテーマで多様な活動をしている団体等がなり、協力してマルシェを開催、また出展・出店する。

マルシェ参加団体は、マルシェの準備から開催を通じて、相互にメンバーや活動内容を知り、情報交換をすることができる。さらに、一つのイベントを作り上げていくなかで、信頼も醸成される。それにより、連鎖的に協働や新しい活動が生まれ展開されていくのではないかと期待される。本実践活動を通じて、実際に新たな発意が生まれ、活動の多様性が得られるのかを把握し、コミュニティプラットフォームの意義を考察する。

#### ②公園を利用することの意義を把握する。

市街地において、公園は、緑やゆとりなど都市の自然環境の側面が重要視されてきた。本実践活動は、誰でもが利用できる、どこにでもある身近な公園で「マルシェ」を行うことで、公園に地域のなかの社会関係形成のハブとなる可能性があることを検証するものである。

出展・出店者の活動を公園というオープンな空間で可視化することで、行政を含めた地域の様々なプレイヤーとの新たな関係性や連携が生まれるのか、また、マルシェに足を運んだ住民が参加団体の活動を見ることで、受動的から能動的な参加への動機づけが得られる可能性があるのか、住民同士の交流や出店者との新たな関係性にも繋がるのかなどに着眼して把握する。

また、「公園」で行うことの意義や効果を、駅前広場でもマルシェを行い、それとの比較を通じて公園活用の意義を明らかにしていく。

#### ③水平展開に向けた機運の把握と課題の整理

本実践活動は、住民が日頃から行っている活動や手作り作品など、費用や労力の面でさほど負担のかからない取組で「マルシェ」に出展・出店することに重点をおいており、それが身近な、どこにでもある公共空間である「公園」で行われることで多くの人に可視化され、「自分もできるのではないか」という参加の動機づけにつながることを期待する。

郊外住宅地が直面しているコミュニティの再生の方法論として有望な、ひとつのモデルケースとして、今後の普及と持続的な展開を企図している。本実践活動では、同様の活動の萌芽等が見られるかなどを把握する。

## 2. 実践活動の対象地と主体、経緯

### 2.1 対象地の川崎市宮前区について

川崎市は、神奈川県北東部に位置し、多摩川を挟んで東京都と隣接し、横浜市と東京都に挟まれた、細長い地形を市域としている。面積は144.35km<sup>2</sup>で、市内を縦断する形でJR南武線が通り、南武線と交差する形で5つの私鉄が横断。海側から京急線、東急東横線、東急田園都市線、小田急線、京王相模原線が走っている。また、川崎市は人口約150万人の政令指定都市として、川崎港側から川崎市、幸区、中原区、高津区、宮前区、多摩区、麻生区の7つの区がある。

宮前区（人口約23万人）は、市内7区の中で最も昼夜人口比率が低く、通勤通学で区外に出て、日中を地元で過ごさず、日常的な交友関係等も区外に持っている人が非常に多い地域である。換言すれば、地元への愛着を持ちにくい住民が数多く暮らすベッドタウンだと言える。宮前区の昼夜間人口比率は男女合計73.4%（2015）で、日本全国の市町村の中でも

第9位の低さである文5)。また、人口は増え続けているものの、転出入が多く、5年前と現在の住所地が異なる移動人口比率が、特に鉄道沿線で30～35%以上と高い(図2-1)文6)。

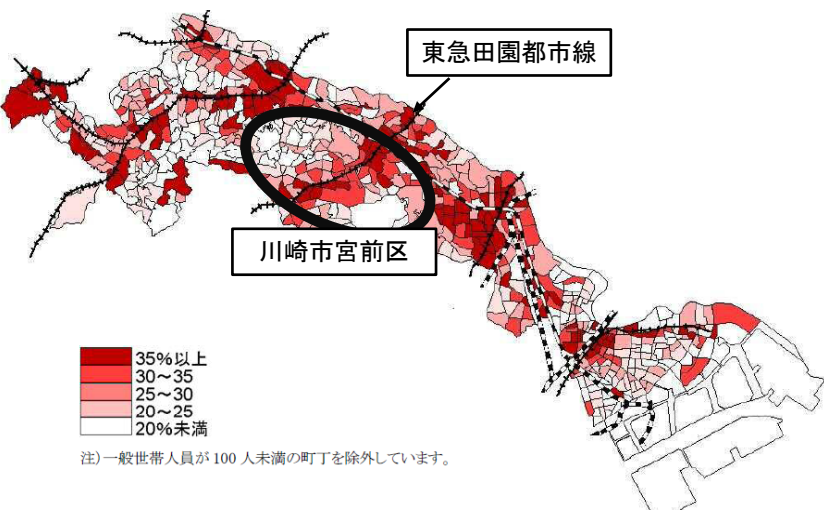


図2-1 居住歴5年未満の人口割合

マンションなどの共同住宅世帯は区内全世帯のほぼ7割であり文6)、前述した近隣関係を築くことが難しい条件の一つである住まい方が際立っている。これもまた鉄道沿線地域で際立って多い(図2-2)文6)。

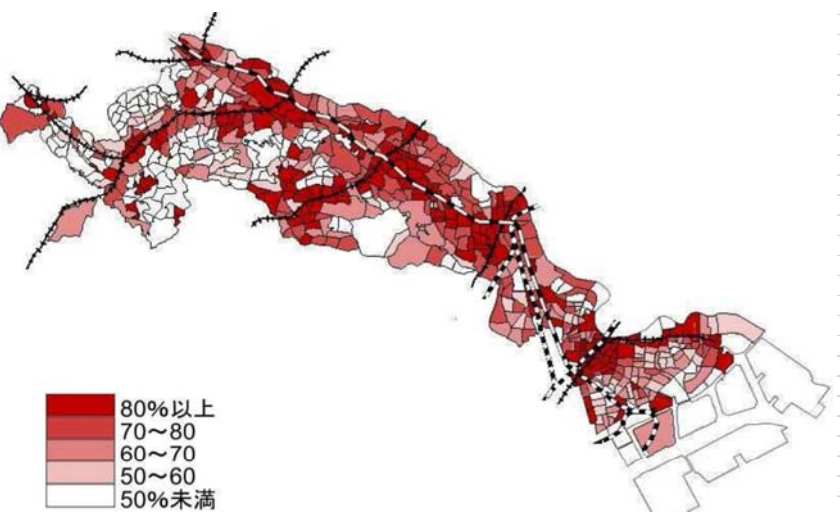


図2-2 町丁別共同住宅の割合

宮前区のコミュニティ意識については、川崎市民アンケートで表2-1のような結果が得られている<sup>文7)</sup>。

本実践活動は、川崎市宮前区、田園都市線の宮崎台駅から徒歩2分の「宮崎台おちば公園」で実施した。宮前区が、郊外住宅地としてコミュニティ形成のむずかしさを内包し、なおかつ住民同士の関係の希薄さを不安に感じている人が多い地域だからである。とりわけ、居住歴の短い、集合住宅居住者が集積している鉄道沿線周辺はその傾向が顕著である。そこで、鉄道沿線周辺の住民を対象とするため、駅に近い公園を選択した。

## 2.2 活動主体と活動の経緯について

### 2.2.1 コミュニティプラットフォーム企画までの経緯

このような背景を抱える宮前区で、2012年に本実践活動の主体である「宮前まち倶楽部」は発足し、目的を「宮前区をベッドタウンから、人々の故郷であるホームタウンに変えるための「仕組づくり」や「場作り」を行うこと」とし、活動の三本柱を「地域資源(人、場所、団体等)の発掘」「資源の可視化」「参加のデザイン」とした。(HP: <http://machi-club.net/>)

地域資源発掘には、地域の各種イベントや活動に足を運ぶ活動を主に、

表2-1 川崎市民アンケート：宮前区抜粋

1 地域の課題	%
①住民同士の関係が薄れている。	25.8
②病院や買い物などの交通が不便	20.7
③住民同士が交流する場や機会の不足	18.3
④高齢者を地域で支える仕組みが不十分	16.4
2 地域の課題解決に有効な取り組み	
①行政からの支援	30.1
②地域住民と行政との協力・連携	24.9
③地域住民の意識の向上	23.0
④住民同士の交流の活性化	19.7
3 社会活動・地域活動に継続的に参加しているか	
①はい	13.1
②いいえ	86.9
4 参加しやすい活動範囲	
①住んでいる町内の範囲	43.7
②住まいから徒歩数分以内	40.4
③自転車圏内	11.7
④最寄り駅から数分圏内	11.7
5 どんな行政の支援が必要か	
①活動場所の提供	35.2
②活動費の助成	34.7
③情報提供の充実	31.9
④人材育成・確保	25.8

ホームページ上に2014年から、区内のイベントを一元的に集めた「みやまえじもとイベントカレンダー」を開設し、情報を収集した。さらに、2015年には、『みやまえ人』発掘ワークショップを開催し、各種市民団体のメンバー数十名にそれぞれが推薦する「宮前区の一押し人」を挙げてもらい、区内の人的資源を網羅的に把握した。

その後、『みやまえ人』の活動現場に足を運ぶことで、多くの団体が、「場、資金、人材」や「情報の発信及び入手方法」の不足に悩み、活動の発展や継続性が危ぶまれる原因になっていることに危機感を抱いていた。

そこで、様々な主体が一堂に会するプラットフォームを準備することで、個々の地域資源(活動団体)が自然に繋がり、連携し協働していく「創発的」注1)な動きが生まれるのではないかと想定した。プラットフォームの具体的な活動の「場」としては、「場や資金、人材の確保」さらに

は「行政や他セクターとの連携」につながり、また普段地域の活動に参加していない住民に活動が可視化され、活動に参加してもらえるような仕組みとして、今回の実践活動となる「公園を使ったまちかどマルシェ」を計画した。

可視化には、多くの人々が自由に入出入りする公共の空間が最適である。普段何げなく足を運ぶ、たまたま目にする、日常生活のなかに存在する、そんな公共空間が公園である。公園は、どこにでもあり、ほとんどの人の徒歩圏内にある。また、大きなオープンスペースである公園であれば、区内の様々な「地域資源」が共に出展・出店して、楽しい場をつくることができ、近隣住民が集い、新しい繋がりや関心も生まれるのではないかと考えた。また、そうした市民発の取組には、行政を含む他のセクターも関心を寄せるのではないかと考えた。

### 2.2.2 コミュニティプラットフォーム設立の経緯

市民活動団体のなかから、子育て世代ママ、小中学生、シニア世代、商店会、祭りを対象に活動しているグループに声をかけ、彼らをオリジナルメンバーとして、「miyamaeぷらっと」(宮前コミュニティプラットフォーム)が2016年12月に発足した。

## 3. 実践活動の内容

### 3.1 「まちかどマルシェ」の独自性

「マルシェ」という言葉から一般的に連想されるのは、個人や商店が野菜やクラフトを販売する市(いち)やマーケットであるが、「まちかどマルシェ」は、モノの売買にとどまらない意味を持ち、以下のように定義される。

**【まちかど】** まちなかにあるいろいろな「公共の空間」。あらゆる年齢層の人が徒歩や自転車で気軽に出かけられる距離にあり、誰でも自由に立ち入ることのできる、まちの拠点になり得る場所。

**【マルシェ】** 住民がいろいろな形で参加している「場」であること。「まちデビュー」「手仕事等販売」「出番作り」「居場所づくり」「知り合い作り」「課題解決」「地元学」など、様々な機能を持ち、多様な課題も解決できる場として、多彩な要素を組み込んで実施される。

上記定義に基づいて、「まちかどマルシェ」には以下の3要素を含む：

**【シェアの要素】** 絵本の読み聞かせや自由に好きな本が読める「まちかどライブラリー」、コーヒーやパンの試飲試食ができる「まちかどカフェ」、市民団体や行政が発行している各種リーフレットやパンフレットなどの配布を含む「まち紹介」、介護。相続・子育て・教育など多様なテーマの活動団体が参加する。

**【マーケットの要素】** シニアや子育て中のママを含む多様な住民の持つ様々なスキルを紹介し、商品の販売や制作ワークショップを実施。地場の朝採り野菜の販売。

**【基金の要素】** まちかどマルシェへの参加費は無料だが、販売活動等により利益を得た場合は、収益の一部(割合は自由)を「まちかど基金」に寄付。それを資金にマルシェを実施し、余剰が出れば、他の活動団体に寄付して活動を応援、まち全体の活性化に寄与する。出店・出展者には、そうした仕組みであることに賛同してもらう。

## 3.2 「まちかどマルシェ」の内容

### 3.2.1 「まちかどマルシェ」の開催日程・場所

本実践研究期間に公園で3回、公園との比較研究のために区内の田園都市線鷺沼駅の駅前広場のなかの店舗前で4回、まちかどマルシェを開催した。特別編として「まちかどライブラリー」を宮前市民館で開催した(表3-1)。

表3-1 まちかどマルシェ日程・場所・準備

開催日				
おちば公園	2017年10月11日	2018年5月16日	2018年10月10日	
鷺沼駅前	2017年9月15日	2017年12月16日	2018年6月14日	2018年9月14日
宮前市民館	2018年3月4日			
主要開催場所				
おちば公園	街区公園、面積：1034㎡、田園都市線宮崎台駅徒歩2分			
鷺沼駅前	田園都市線鷺沼駅前広場内「東急電鉄住まいと暮らしのコンシェルジュ」店舗前デッキ(幅8メートル×奥行2.5メートル)+2階会議室			
事前準備+広報活動				
打ち合わせ	開催日1か月前に全参加者で打ち合わせ、開催後は反省会			
チラシ制作	開催1か月前の打ち合わせで内容確認制作			
広報活動	開催日1週間前に開催場所周辺でチラシ配布(300枚)			
	宮崎台+鷺沼駅構内の宮前区観光協会のラック(100枚)			
	他イベントでの配布、友人知人への配布(200枚)			
	近隣店舗での掲示及び配布(50枚)			
	参加団体のHP、フェイスブックなどSNS			

### 3.2.2 コミュニティプラットフォームのメンバー

表3-2 マルシェの参加団体

団体名	活動内容	鷺沼駅前	おちば公園	鷺沼駅前	宮前市民館広場	おちば公園	鷺沼駅前	鷺沼駅前	おちば公園
		2017年9月	2017年10月	2017年12月	2018年3月	2018年5月	2018年6月	2018年9月	2018年10月
参加団体数		10	7	10	9	8	9	9	10
ママオン	手作り作家ママネットワーク	●	○	○		○	○		○
じもたんキッズ	地元小学生新聞制作	●	○	○	○	○	○	○	○
さくら坂スタジオ	さくら祭り運営	●	○	○		○			○
宮前まち倶楽部	地域連携	●	○	○	○	○	○	○	○
Natural Art	まちゼミ・商店会活動	●	○	○		○	○	○	
こがも会	相続介護シニア支援	●	○	○	○	○	○	○	○
農あるまち委員会	区内の農家を応援	○		○	○		○	○	
コネクト	帰国子女ママグループ		○	○					
ユイット	シニア手作りサークル	○				○			○
Miyamae Small Business Network	手作り作家ネットワーク					○	○	○	
サンフェスタ	子育てママ応援							○	
小泉農園	農家+農園フェス開催	○		○	○		○	○	
はぐるま農園	都市型福祉農園	○		○	○		○	○	
グリーンバード	清掃活動								○
ムラセさん歩の会	早朝散歩ネットワーク								○
ぴーんずネット	子育て支援								○
畑はじめ	農家+新住民による畑								○
花の停留所	花農家+マルシェ開催				○				
ささらプロダクション	映像と書籍で地域史を残す				○				
宮前市民館	区役所生涯学習支援課				○				
花の台町内会	町内会								協力
東京急行電鉄	民間企業	後援		後援			後援	後援	
宮前区観光協会	任意団体	後援	後援	後援		後援	後援	後援	後援
鷺沼商店会	商店会	後援		後援			後援		

「miyamaeぷらっと」のオリジナルメンバーは「宮前ま  
ち倶楽部」が呼び掛けた。その後マルシェごとに参加団体は  
変化し、新たな団体の参加依頼や紹介によって、新メンバー  
が加わり総数は増加した。（表3-2、図3-1）。

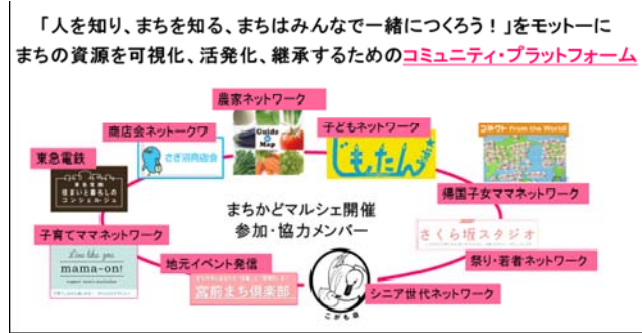


図3-1 コミュニティプラットフォームのイメージ図

### 3.3 まちかどマルシェの当日の内容

以下に要点と成果をまとめる（表3-3～3-10）。

#### ■まちかどマルシェ1回目

表3-3 まちかどマルシェ1回目の要点

開催日	2017年9月15日 快晴
開催場所	鷺沼駅前広場店舗前デッキ
開催時間	10時～16時
出展団体	10団体延べ15名
内容	地場野菜販売、手作り作品販売、手作り品制作ワークショップ、ねこ足昆布だし販売、エンディングノートの書き方ワークショップ、
売上	89,174円(この中からまちかど基金に一部寄付) 野菜売上:24,419円(全額まちかど基金に)
当日の様子	鷺沼駅前の改札そばという立地は、多くの人が目的地に向かって急ぎ足で通り過ぎていく。なかなか足を止めてくれない。 地場野菜:シーズンのみやまえ梨をはじめ、多種揃ったこともあり、10時の開始後から、あっという間に売り切れた。みやまえ梨というブランド品も、宮前区に農家があることにも、驚く人が多い。 マルシェの出現に「どういうグループ?」「どこの業者さん?」などと何度も質問され、その度に趣旨を説明した。 手作り品を出店したシニアグループとこがも会とのコラボレーション:こがも会発行のエンディングノートに布カバーをつけて販売するという企画。 ダブルケア:子育て中の若いママの中にも、ダブルケアで苦勞している人がおり、こがも会の話がどこで聞けるのかわからなかったと。 若いママたちの手作り小物はあまり売れず、がっかりした様子だった。

#### ■まちかどマルシェ2回目

表3-4 まちかどマルシェ2回目の要点 (図3-2)

開催日	2017年10月15日(水) 秋晴れ
開催場所	宮崎台おちば公園
開催時間	10時～16時
来場者数	親子150名ほど(アンケート回答数72から推計)
出展団体	7団体延べ20名
出展内容	手作り作品の販売、手作り品制作ワークショップ、カラーセラピー、写真撮影会、ゲーム、まちかどライブラリー、まち案内コーナー、介護相続井戸端会議、じもとんキッズ+コネクトの制作冊子販売、ねこ足出汁こんぶ販売
売上	75,096円(この中からまちかど基金に一部寄付) 野菜販売なし

気候も良く、公園での初開催であったが、区内の活動団体、行政職員も見学に訪れ、公園の賑わいに驚いていた。また、地元ニュース誌「タウンニュース」やFM神奈川（実況中継）が関心をもってくれた。手作り作品の販売や制作ワークショップでは、乳幼児連れママが、店舗では公園だと安心で嬉しいと、買い手と談笑する様が見られた。また、注文や、自宅で開講している教室やワークショップへの参加にも結びついた。絵本の読み聞かせも人気で、交代で何冊も読み聞かせをした。総じて穏やかな時間の流れの中で、誰もが安心してゆったりと時間を過ごしていた。

開催後の反省会では、売り上げは駅前のほうが多いものの、満足度という面では、公園のほうがはるかに高いという意見が多く出た。

また他地域のマルシェに参加している出店者は、地元で開催する楽しさ（自分の子供が友達を連れてくる、友達のお母さんがくる、いろんな情報交換ができるなど）が満足度の高さにつながっていると話した。自分自身が地元の楽しさを感じていなかったという出店者もいた。

課題は町内会との関係である。公園は町内会が花壇や樹木の剪定、清掃をしている。その場を活用するには町内会に理解を求めることが必要だ。また町内会の掲示板へのチラシ掲示の許可も得なかった。活動にある程度の理解は得られたものの、物品販売という営利活動を伴うものは、町内会の趣旨と合致せず、チラシ掲示はできないと断られた。今後町内会活動への参加等を通じて、粘り強く良い関係を築いていくことが課題となった。

- ① 公園入口にバルーンアート
- ② 手作り作品販売
- ③ ハロウィン撮影会+ゲーム
- ④ 砂場でのんびり
- ⑤ まちのとおき情報伝えます
- ⑥ 小学生新聞紹介
- ⑦ 絵本の読み聞かせ
- ⑧ 公園の巨大なシンボルツリー
- ⑨ 午後は小学生もたくさん
- ⑩ 午前には近隣の保育園児が



図3-2 マルシェ開催時のおちば公園の中の様子及び配置図

### ■まちかどマルシェ3回目



写真3-2 はぐるま農園



写真3-3 孫へのプレゼント

### ■まちかどマルシェ4回目



写真3-4 まちかどライブラリー

### ■まちかどマルシェ5回目

表3-5 街角マルシェ5回目の要点

開催日	2018年5月16日(水) 例年になく暑く日差しが強い
開催場所	宮崎台おちば公園
開催時間	10時～16時
来場者数	60名程度(アンケート回答数21から推計)
出展団体	8団体延べ21名
出展内容	手作り作品の販売、手作り品制作ワークショップ、カラーセラピー、リラクゼーションコーナー、写真撮影会、似顔絵描き、シャボン玉コーナー、まちかどライブラリー、まち案内コーナー、介護相続井戸端会議、じもたんキッズ制作冊子販売、ねこ足出汁こんぶ販売
売上	37,180円(この中からまちかど基金に一部寄付) 野菜販売なし

さわやかな薫風のもとでの開催を思い5月に開催した。新学期準備などで疲れたママのための「癒しマルシェ」とした。しかし例年より5度も気温の高い日差しの強い日となり、人がほとんど来なかった。天気によって左右される屋外開催の難しさを実感した。しかし人が少ないからこそ、参加者同士でゆっくり話ができた(写真3-5)。公園という、ルールに縛られないゆるやかな場づくりの意義を実感することができた。

前回のマルシェは若いママたちが溢れ、中を覗いても入ってこなかったシニアの方たちの参加があった。特に公園から徒歩3分の老人福祉センターの常連の方たちから、マルシェを開催するなら事前に老人福祉センターにもチラシを置きに来てほしいと依頼された(センターは公共施設のため、チラシは置いてもらえないことが後日判明)。同様に、周囲の保育園から絵本等を自由に読むことのできる機会があるなら、事前に開催日程を知らせてほしいとの依頼も受けた。

また、幼児連れの母親が移動式の小型ライブラリーの前で、自主的に他の子供たちに向けて、自然発生的に大型絵本の読み聞かせを始めていたのも印象的だった(写真3-6)。この他にも、まちかどライブラリーをじっと眺めておられた高齢の女性が、いったん自宅に戻られた後、「孫に買ったけれどなかなか届けられないうちに日がたってしまった。私の一押し絵本なのでライブラリーに置いてもらえないか」とその本を持参されるということも起こった。本という媒体の人を繋ぐ力、また多様な参加の仕方を促す力を実感した。



写真3-6 自然発生的な絵本の読み聞かせ

## ■まちかどマルシェ6回目



写真3-7 育児真っ只中のママさんたち

## ■まちかどマルシェ7回目



写真3-8 店舗入り口に映画上映会のポスター

## ■まちかどマルシェ8回目

おちば公園での開催も3回目になり、町内会の掲示板へのチラシ掲載の許可が出た。町会の様々な催しに参加し、賛同者を増やすよう心掛けた。7月には町会の広報担当委員の英断もあり、町内会広報誌にまちかどマルシェの様子が掲載された。9月1日には町内会長をはじめとした町内会メンバーとの懇談会を開催し、相互協力することの意義をご理解いただいた。掲示板に貼りに歩き、当日は実際に町内会の掲示板を見てきましたという、乳児を抱えたお母さんなど数人に出

表3-6 まちかどマルシェ8回目の要点

開催日	2018年10月10日(水)快晴
開催場所	宮崎台おちば公園
開催時間	10時～17時 (午前7～10時他団体による朝企画)
来場者数	350名程度(子供へのアンパンマンティッシュ配布数176より推計)
出展団体	8団体延べ21名
出展内容	手作り作品の販売、手作り品制作ワークショップ、カラーセラピー、リラクゼーションコーナー、写真撮影会、まちかどライブラリー、まち案内コーナー、介護相続井戸端会議、まちかどカフェ(試飲試食)、じもたんキッズ押し文具販売、じもたんキッズ制作冊子販売
売上	104,600円(ここからまちかど基金に一部拠出) 野菜販売なし

会った。小地域でのコミュニティ作りにおいて、町内会や自治会などの伝統的な地縁組織と新たな市民活動団体が、公園という共通の基盤で協力しあえる関係性を構築できる可能性が見えた。また今回のマルシェには近隣のセレサ川崎農業協同組合の店長が来場、店舗前に大きな駐車場があるが埋まらないし、若い人が少ない。町内会に相談したところ、まちかどマルシェを紹介されたと言われた。ターゲットにしたい年齢層のお母さんたちが多くマルシェに可能性を感じられたようで、企画中のマルシェサミットにお誘いしたところ、当日参加された(10月26日開催)。

また、公園で普段見かけない背広姿の男性数名に気付き声をかけると、近くの信用金庫の職員の方たちだった。その後戻られて、今度は上司を連れて来場。子どもへのアンパンマンティッシュを500個寄付してくださった。

さらに、マルシェ前日には、まちかどマルシェを複数回取材しているタウンニュース記者から、区内の聖マリアナ医科大学病院が昨年度より、病院を地域に開放するオープンホスピタルというイベントを開催しており、タウンニュースに参加市民活動団体の照会があったので、まちかどマルシェを紹介したと連絡が入った。物品の販売はできないので、マルシェ当日にこがも会、じもたんキッズ、宮前まち倶楽部で相談し、一つのブースに3団体で参加することにした(11月3日に実施)。

その他にも、市内の耕作放棄地で市が実験的に作っているかぼちゃピュレを使ったパンの試食会を行った。

またもう一つの特筆すべき出来事は、まちかどマルシェ開催日の早朝に、他の団体によって新たな取組が行われたことだ。隔週で早朝散歩と清掃をしているグループで、自分たちも公園を活用して地域の人に働きかけたいと、マルシェの朝企画として、公園清掃と朝カフェ、さらにその団体の子育てカウンセラーによる子育て青空勉強会も開催された。当日は小さな朝カフェが登場、清々しい空気の中、気持ちのいいマルシェがスタートした。

公園はどこにでもある空間だが、それが本当に活用されているかどうかは疑わしい。まちかどマルシェを開催しているおちば公園も、平日の午後3時以降は、幼稚園児を連れてママグループが立ち寄り賑やかになるものの(写真3-9)、午前中は静けさに満ちている。



写真3-9 開催日の公園の様子



#### 4. 実践活動から得られた成果と評価

本活動を通じて、当初6団体だったプラットフォームへの参加団体数は26に増え、新たなつながりや連携、マルシェ以外の場での活動や事業の機会等が数多く提供された。この動きはまた、多くの情報提供の機会を得て発信された(表4-1)。

表4-1 活動から得られた成果一覧

まちかどマルシェへの参加団体数		
①	当初6団体⇒26団体(協力、協賛含む)(2018年10月末日)	
マルシェ参加団体間の新たな連携		
②	オープンホスピタルにメンバー団体が合同で参加(2018年11月3日)	
③	メンバーの販売する冊子に他メンバーがカバーを制作販売へ	
④	複数メンバーで他マルシェに参加	
⑤	メンバーによる他公園でのマルシェ開催(2018年10月、11月、12月)	
⑥	メンバー団体の開催するセミナーに他メンバーが参加	
⑦	マルシェサミットの開催(2018年10月26日)	
他主体・セクターとのつながり、連携		
⑧	住民	マルシェで子どもたちに主体的に読み聞かせを行う住民の登場
⑨		マルシェへの出展希望の問い合わせ
⑩		マルシェへの本の寄付
⑪		マルシェ後にメンバー団体への連絡や購入・制作依頼
⑫	行政	まちかどライブラリーの市民館での開催依頼
⑬		公園へのライブラリー常設設置に向けた企画発足
⑭		まちかどライブラリーの全市版を実施(2019年3月予定)
⑮		市が開催するイベントへの参加協力依頼
⑯		小学校の夏祭りでのマルシェ出展依頼
⑰		区制作の各種チラシをマルシェで配布
⑱	地域団体	宮前観光協会から広報誌記事執筆依頼
⑲		町内会のチラシをマルシェで配布
⑳		高齢者支援ボランティア団体からの連携依頼
㉑		老人会からの講演依頼
㉒	マルシェ当日、他団体による朝企画実施(2018年10月10日)	
㉓	農家	農家から農作物の寄付
㉔		農家からのマルシェでの農作物試食依頼
㉕	民間	農協からのマルシェ開催場所提供申し出(農協駐車場)
㉖		近隣信用金庫からの協力申し出
㉗		区内病院からのオープンホスピタル出展依頼
情報発信		
㉘	地元紙「タウンニュース」への掲載複数回	
㉙	町内会広報誌にまちかどマルシェの記事掲載(2018年7月号)	
㉚	まちづくり協議会の広報誌への掲載(2018年9月号)	
㉛	市長との車座集会での発表(2018年11月18日予定)	
㉜	東大全学ゼミ(奥村裕一教授)で事例報告(2018年10月26日)	
㉝	全国マイクロライブラリーサミットでの事例発表(2018年5月13日)	
㉞	「宮前メッセ」でまちかどマルシェの紹介(2018年3月10日)	
㉟	宮前農フォーラムで発表(2018年3月11日)	
㊱	横浜FM放送による実況中継(2017年10月11日)	

この新たに起こった、または得られた機会(①～㊱)によって、「地域コミュニティ活動の活性化」の課題とされている「担い手」「活動場所」「資金」「情報発信」「つながり」の不足がどれほど補われたかを、本活動の効果として検証した(表4-2)(例:病院という「活動場所」、新たな「情報発信機会」、合同参加による「つながり」を得られたと評価)。

その結果、地域活動の活性化を促すさまざまな効果が得られたことが確認できた。特に「情報発信」「新たな繋がりや連携、協働事業」の機会が数多く提供された。異なるテーマやセクター間で連携することで、個々の主体個別の活動からは得られなかった、新たな視点や新規の課題解決手法により、これまで以上に多様で包摂的な地域活動が展開される

可能性が見いだせた。

「住民の新たな参加」が一足飛びには進まないことは当初より予想されたが、他の公園や場所でのマルシェ開催という水平展開もすでに始まっていること、今後も身近な場所でマルシェが開催されていくこと、また、新たな担い手の確保には不可欠な「楽しさ」がこの活動から発信されていることから、人々の参加の意識が次第に醸成されていくことが期待される。

表4-2 地域活動活性化への効果

効果	成果番号	件数
マルシェ以外の、新たな活動場所が提供されたケース	②④⑤⑫⑬⑮⑯⑲⑳㉑㉒㉓	11件
マルシェ以外の場での、販売等の場を得て、資金確保の機会を得たケース	④⑤⑪⑲㉓	5件
住民の新たな参加の可能性が見えたケース	⑧⑨⑩	3件
情報発信の機会が得られたケース	②④⑤⑦⑫⑬⑮⑯⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗	18件
参加団体間や他セクターとのつながり、連携、協働事業が新たに生まれたケース	①②③④⑤⑥⑦⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗	22件

#### 5. 実践活動を通じて得られた学び

##### 5.1 コミュニティプラットフォームの可能性と課題

個々の市民活動団体の活動の活性化には、**地域のなかで信頼を得ていくことが不可欠**であるが、それには地道な努力と年月が必要である。しかしコミュニティプラットフォームという形態は、多様な主体の複合体であることで、私益ではなく公益的な活動として容易に認知され、プラットフォームも、メンバー団体も、行政や民間企業、さらに町内会や住民からの「信頼」を得て、多様な活動機会を得やすくなることがわかった。公園、駅前広場、市民館広場の利用許可を得られたのも、プラットフォームという存在があればこそ可能となった。

本実践活動では、以前からの地域活動を通じて信頼できる個人や団体を特定できていたため、そうした人達に参加をまずは呼び掛けたが、マルシェの回を重ねるごとに、プラットフォームに入りたい人や団体から、多数の問い合わせを受けた。また反対に、既得権を守ろうと、新たな人の参加を拒むケースも発生した。**プラットフォームというコミュニティ基盤が有効であると認知されればされるほど、どのような組織運営形態をとっていくことが良いのか、今後の大きな課題**である。

##### 5.2 公園という公共空間

今回活動場所として、**誰もがアクセスできる屋外の公共空間である公園や駅前を選んだのは、プラットフォームメンバーの活動の可視化を最大の目的**としたからで、それはある程度の効果を得た。それに加え、公園では人々の滞留時間が長く、訪れる住民と参加メンバーとの自然発生的な、何気ない会話が数多く生まれ、そこから住民の抱えるさまざまな課題やニーズもまた、共有され、可視化できることがわかった。

特に、今回あまり効果が得られなかった**「住民の新たな担い手としての活動への参加」**という部分では、活動に関心がまったくないのではなく、関心があっても参加の方法がわからない、また見知らぬ

人々の輪のなかに一人が入っていく勇気がないなどの課題が浮かび上がった。住民へのより効果的なアプローチの方法や情報発信に変えることで、担い手不足という課題を解決する糸口も見えてきそうである。そうした意味でも、住民が身近な公園で市民活動に気軽に会える、マルシェのような場があることの意義は大きい。

## 6. 結び：今後の課題

本実践活動を通じて、公園が住民の新たな関係性を構築し、課題を解決していくハブとなっていく可能性を有していることが十分に認められた。またコミュニティプラットフォームという基盤の意義も確認された。まちづくりに参加しようという市民による、地域貢献活動の重なりが、社会的包摂的の高いコミュニティを作っていく。今回はまちかどマルシェを開催することに注力し、十分なインタビューやアンケート調査を実施できなかった。今後の課題である。類似の全国や海外の事例との比較研究も行い、住民主体のコミュニティプラットフォームの在り方に関する方法論の確立を目指して、今後も活動と研究を続けていきたい。

### <謝辞>

本実践においてはmiyamaeぷらっと及び宮前まち倶楽部のメンバーには多大なご協力をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。

### <研究主査>

- ・辻 麻里子  
宮前まち倶楽部 代表・工学修士

### <研究委員>

- ・渡邊 秀樹  
有限会社リノベイトダブリュ代表取締役・工学修士
- ・藤牧 功太郎  
新宿区役所・工学修士

### <研究協力者>

- ・齋藤 陽子  
宮前まち倶楽部
- ・入田 基之  
宮前まち倶楽部
- ・青柳 和美  
宮前まち倶楽部 (写真提供)

\* 当実践研究報告普及版は『住総研 研究論文集・実践研究報告集』No.45の抜粋版です。参考文献は報告集本書をご覧ください。